

九州を元気にするハブ&スポーク・ネットワーク



1 九州の元気づくりに必要なパイプと4つのミネラル

現在の九州では、地域間競争バランスによる偏在した経済活動や消費活動が顕著であり、それらが南北格差・東西格差問題を生み、これまで以上に連携強化策が求められている。そこで、九州アイランドを外圧に対し健全で頑丈な地域にする仕組みを【パイプと4つのミネラル】という切り口から提案する。

パイプは移動の空間、ミネラルは『エネルギー、水、情報、文化』

パイプ；移動の空間＝道路、空港、鉄道、港

エネルギー；地域経営に必要な経済・産業活動エネルギー

水；生活資源たる水の供給

情報；人・モノの移動の前提条件

文化；物の豊かさを補う文化

今後、九州地域を元気にする際に、移動する空間にこの4つのミネラルをどう調合させるかがポイントとなる。

1-1 歴史に見る文化と拠点

博多という町が近世からここまで発展してきたのは、前述のミネラルは十分ではなく、歴史を経た陸・海の結節点、交差点というポジショニングが大きい。

つまり、あらゆる情報が集まり、各方面から人が集い、そこに文化が生まれる仕組みがあったからである。色々な意味で人・物の交流に4つのミネラルを混合させることが、今後の地域活性化の鍵となる事例である。この視点で都道府県間の人口移動を取り上げてみると、福岡県の県間移動の一位は東京、九州内では各地域と福岡県間で最も多い。一方、情報では、福岡県以外の県・地域は福岡以外にも東京や関西あるいは海外という多様な実態がある。九州全体の連携としての大きなパイプが不足している感が否めない。

そこで注目したいのが文化である。かつて九州は多くの文化伝来の地域であった。我が国の文化においてこれまで5つの場面で九州が関与している。まずは大化の改新に中国から九州を経て文明が入り近畿に伝来。これは中継拠点としての九州を意味する。次にザビエルの上陸は宗教文化として一部とどまり近畿へ流布したことでやはり中継拠点である。そして明治維新ではヨーロッパ文明を受け、江戸期から開港していた平戸や長崎を経て東京中心に開花。さらに戦後は、アメリカ文明が全国に平均的に伝わる。この延長上に現在は「東アジア」地域から偏西風が押し寄せている。この文化の風を有効に活かすには九州内の拠点（ハブ）と各地域間の連携軸（スポーク）を強化し、我が国におけるミネラル豊富な地域として発展しなければならない。

1-2 元気ツールとしての地域構造

九州は全国に比較して65歳以上の高齢者の占める割合が高く、人口減とともに大きな課題である。しかし、これをプラス要因と評価し、高齢者と言う概念をフレックスタイム同様『フレックス・エイジ』と読替え、様々な雇用機会の創出により人口は減っても個人所得を増加させれば豊かな生活構造が期待できる。

その実現には、フレックスエイジの方々が安心して楽しく社会参加できる移動構造を備えなければいけない。

一つは ➡ 早く動く交通システム（高速道路，九州新幹線，航空機）

さらに ➡ ゆっくり動ける交通システム（自転車道、風景街道、路地空間）のコラボレーションを提供することである。

道路を例にすれば交通手段であるとともに社会空間であることから、道路をスピードで支配させるのは高速道路など一部のネットワークに任せ、その他の道路を様々な情報収集や沿道景観をゆっくり楽しめる空間にすべきと考える。

すなわち、地域が元気になるためのツールとして、

『スピードは支配するもの、スピードに支配されず、スピードを使い切る地域構造』への転換が必要と言える。この際、人口そのものは重要な要素だが、定住人口ではなく、鍵は動く（移動）人口である。九州全体の人口は1,300万人だが、例えば観光で動く人口は一年間で3億人にも及ぶことから、極論かも知れないが3億人の人口をどう管理するかがポイントと言える。

(1) 動くことを地域活力剤に

大分県の観光客は県内客が20%、九州各県含む他県からが80%（うち30%は福岡県）を占める。多くの地域から交流があることから、これまでの域内市場のスタイルから、今や単一観光に加えスポーツ観戦，登山や文化活動などの体験交流など多目的に「動くこと」を活力剤にした地域交流へと変貌しつつある。

よって、動くことを活力剤にするには、媒体となる交通（移動）ネットワークの組み合わせにより地域の動脈硬化をなくし、他のミレをどう混和するかが重要になる。

その際に、九州の地域構造や移動環境を前提に分析する必要がある。

（以下の比較は、2008.7時点の市町村データで処理）

九州には251の市町村、100万人規模の政令市を除けば20万人規模の13都市が点在し、（高速道路を例にとれば）全国40%に対し、九州は66%の市町村にインターチェンジがない。またインターチェンジ間隔（都市間）も最大で39kmと長い！

市町村の平均人口

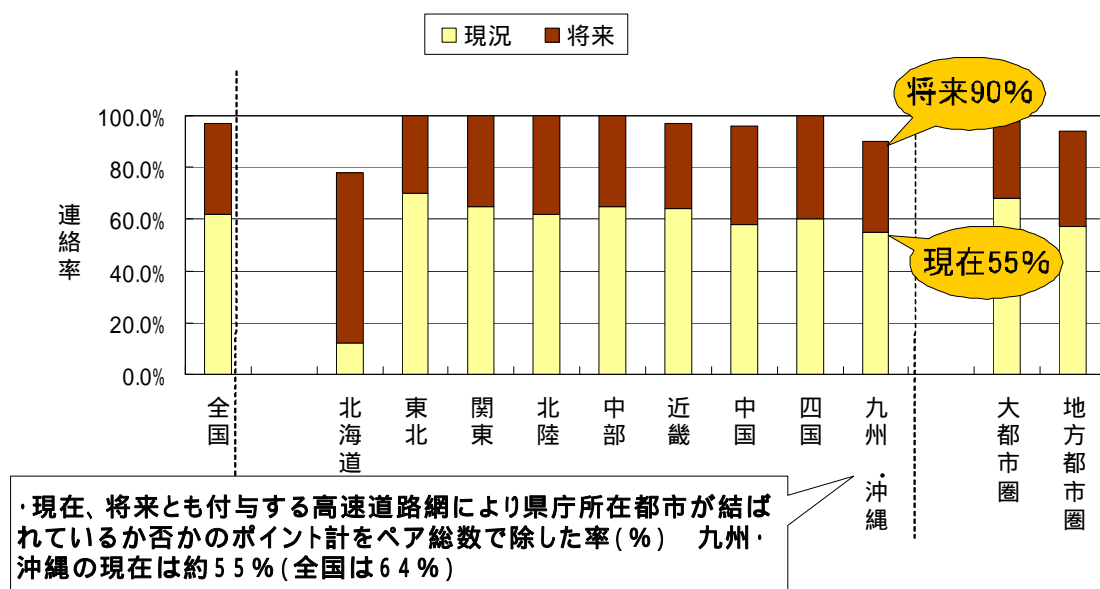
全国が3.9万人に対して九州は2.5万人

高速道路のインターチェンジ間距離

全国と比べ平均間隔は約10kmで大差ないが、最大間隔で見れば

九州縦貫道39km，東九州道23km，大分道24km，宮崎道27km

さらに、主要都市間について他の都市と高速道路網にて確実に連絡されているか否か（連絡率）を検証したところ、図-1のように全国平均に比べ55%と低い。これらを克服するには、県境を意識せず拠点間を密に繋ぎネットワークを高める必要がある。その具体策として、既存の高速道路を活用しサービス機能を高める有効施策としてETC専用の『スマートインター整備』が進められている。このように、拠点間が離れて規模の小さい九州には連携強化策が有効と言える。



注1) ブロック間などをまたがるリンクは、それぞれのブロックなどに重複して算入。
 注2) 大都市圏は首都圏(東京、千葉、埼玉、神奈川)、中部圏(愛知、三重)と近畿圏(大阪、兵庫、京都)で構成。

図-1 重要拠点連絡率 出典：国土と高速道路の未来(日経BP)

(2)過疎地域からの脱却

九州の過疎地域は全市町村の53%を占める。過疎地域の活性化には、企業誘致などの依存型、地場産業を興す特産品開発型、観光交流型などが導入されているが、依然として一体感に乏しい。海側の町々には4つのミネルがあり、パイプとなる空港や港もある。これは動ける地域を意味する。一方で、九州中央部の険しい山間部には無論のこと海路はなし、空港もない。よって、山間部でのパイプは道路のみであり、熊本県の人吉市や宮崎県のえびの市は、九州縦貫道により海側の八代市などと大きなゾーンを形成し、過疎地域からの脱却が進められている。まさに、山があっても山を活かせきれなかった地域が高速道路と言うパイプで4つのミネルが混ざり合い、大きな集積圏を形成した好事例と言える。他に福岡都市圏と黒川・由布院地域による集積圏も同様である。そこにはワンセットの思想はなく、各地域の旨み(資源、自然・文化)をネットワークすることで広域集積圏を創る共通理念がある。

(3)情報軸・エネルギー軸と一体化する新たな移動軸

広域集積圏に必要な移動軸の具体像を探る際に、道に関わる変遷も必要である。

古代から中世にかけ存在した「けもの道」や「街道」世代

その空間に「自動車」が入る道の世代（現在）

時間指定の物流など「情報」を持った道の世代（現在から近未来）

そして第四世代の道に求められるのは、具体的には移動に要するコストやエネルギーの無駄を軽減もしくは無くすと言ったテーマである。ヒントはフェリーの搬送にある。図-2に示すように、宮崎県のインターチェンジで運転手が車を降り、無人トラックが東京まで石油代替エネルギーにより積荷のみで運行し、着くと現地の運転手がトラックを運転し物資を届けるしくみである。『無人走行』により、4割を占める人件費の節減と全機関の7割のエネルギー消費率を軽減するビジネスモデルである。燃料高騰の最中、搬送コスト縮減、安全確保、環境保全に期待できる。また、排気ガスを生じないため、新設道路の断面を小さくでき、建設費も軽減できる。さらに、余剰時間を別なビジネスや余暇活動に充てることで、「動く」活力剤が地域に副次効果として元気を与える。

「フェリー」の場合、時間制約（待時間のロス）があり無駄と限界がある。

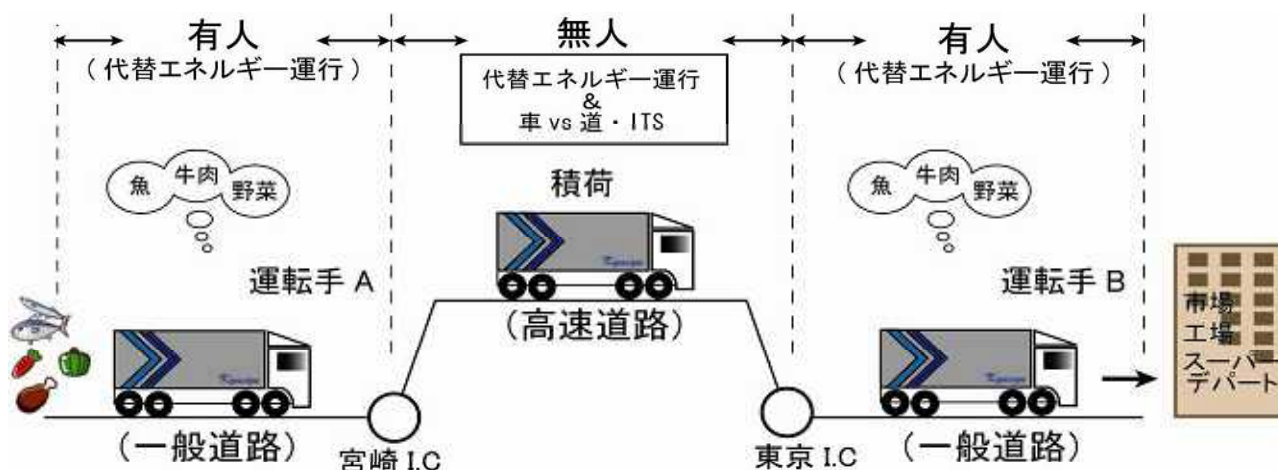


図-2 第四世代の道

ちなみに情報やエネルギーに関する軸はすでに光ファイバーケーブル敷設や上下水道及び洪水備蓄トンネルなどに例があるが、無人化走行にシフトする第四世代の道は、これらの軸を含む画期的な走行空間モデルとなるものである。

2 地域活性化の基本となるハブ&スポーク

前述のように、九州は我が国で最も地域連携を必要とする地域で、今後そのマネジメントが必要である。「連携」= 繋ぐに置き換えた場合、幸いにもその匠の技は「石橋」と「架橋技術」に見ることができる。水の欲しい地域に水のある地域から送る役目の「通潤橋（熊本県）」や海路を陸路に変えた「西海橋」, 「天草五橋」, 「若戸大橋」など地域連携に果たしたパイプである。素材、資源と技の揃う九州で、東アジアの風を受け、地の利（ハブ）のもと様々な連携（スポーク）に各地域のミネラルを織り交ぜることが発展のポイントである。

【提案要旨】

九州内の個々の県または地域は、特色を活かした活性化がなされているが、九州全域としての目指す姿が今ひとつ描かれていない。その要因の一つを拠点と連携の弱さに捉え、移動空間のあり方を探った提案である。

切り口を、移動の空間たる「パイプ」と地域に具備すべき4つのミネラル「エネルギー、水、情報、文化」に置き、九州が元気になるためのハブ（拠点）&スポーク（連携軸）・ネットワークの姿を模索した。